

小学校教員養成課程の大学生の英語および英語指導 に対する意識

— 小学校から高等学校の経年比較に基づいて —

渡 邊 政 寿*・大 場 浩 正*
(令和4年9月9日受付；令和4年11月14日受理)

要 旨

本稿の目的は、小学校教員養成課程に学ぶ大学生が、大学入学時に過去の英語学習を振り返り、英語やこれまでに受けてきた英語の指導をどのように感じているかを明らかにすることである。特に、過去10年に渡る新入生の意識の経年比較を行うことで、社会や教育の変化に影響を受けているかを探索的に調査した結果を報告する。2013年度から2022年度の新生延べ742名に対して実施した質問紙調査の結果、「英語が好き」への回答の平均値は3.14から3.77（5段階）で推移しており、あまり大きな変化は見られなかった。また、どちらかと言うと「英語は不得意である」という傾向も変わらなかった。英語学習の楽しさに関しては、小学校の平均値が高く、中学校、高等学校と段々下がっており、この傾向は毎年変化がなかった。しかしながら、これらの量的分析に加え、学生の自由記述による質的分析から、個々の学生の英語や英語学習への意識は多様であることが明らかになった。小学校中学年における外国語活動の必修化や高学年における外国語の教科化に伴い、本研究の結果に基づいて、小学校教員養成課程の大学生が英語を学び続けるだけでなく、その能力を伸ばすことのできるカリキュラムの編成が今後益々必要となるであろう。

KEY WORDS

Elementary School Teacher Training Program 小学校教員養成課程 Awareness of English 英語に対する意識
Awareness of English Teaching 英語指導に対する意識 Comparison over Time 経年比較

1 はじめに

文部科学省（2013）は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小学校・中学校・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るために「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。さらに、2020年より順次、小学校から高等学校までの学習指導要領が改訂され、これらの事は大学入試をはじめ確実に大学教育へ影響を与えている。社会のニーズに対応するような英語力をつけるためのカリキュラム編成が必要であるが、同時に、各大学・学部が新入生の英語やこれまでの英語学習に対する意識を調査することは、学生たちが意欲的に英語を学んでいくための授業方法や授業設計へ大きな示唆を与えるものであろう。

大学生の英語学習への意識を調査した研究として、古家・櫻井（2014）は、2013年度新入生のうち、英語履修予定者1,153名に対してアンケート調査を実施し、英語学習者のニーズ分析を行った。「英語についてどう思うか」という質問に対する回答は、23%が好きと答え、嫌い・大嫌いという否定的な回答は22%であった。「英語で実現できたらよいと思うことのうち、1つだけ選ぶとしたらどれか」という質問に対しては、61%がコミュニケーション（外国人と英語でコミュニケーションを図る）を選択した。次いで「資格（TOEICの点数を伸ばしたり、英検などに合格したりする）」が選ばれた。このことから、英語を使ってコミュニケーションを図りたいという学生からの強い願望が見えるとまとめている。「得意な分野」に関しては、リーディングが33%、リスニングが24%であった。それに対して、「不得意な分野」に関しては、リスニングが23%、スピーキングが20%、文法が18%、そしてライティングが16%の順であった。「身につけたい分野」の回答では、スピーキングが60%に及んでいた。

松崎（2021）は、芸術学部と人間発達学部の全学総合共通科目「英語1」の受講者440名を対象に「英語学習に関するアンケート」を実施した。「英語は好きですか」の質問に対して、5段階で回答を求めた結果、平均2.7であり、どちらかと言うと「嫌い」の傾向が強かった。「英語は得意ですか」の質問に対しては、苦手など否定的な回答をした学生が78%を占めた。4技能のうち「どのスキルが上手になりたいですか」という質問に対しては、「話す」「聴く」の音声に関係するスキルが多いのが特徴であった。これは、古家・櫻井（2014）と同様の結果であった。

このように、各大学・学部において、英語や英語学習に対してどのような意識を持って入学してきたのかを調査していくことは重要である。本研究では、小学校教員養成課程に学ぶ大学1年生が、大学入学時にこれまでの自身の英語学習を振り返り、英語やこれまでに受けてきた英語の指導にどのような意識を持っているかを報告する。特に、2013年度から2022年度の10年間に渡る経年変化の観点から明らかにすることで、社会や教育の変化に影響を受けているかを探索的に調査するものである。小学校教員養成課程の学生は、小学校教員免許状を取得することが卒業要件になっており、実際に、多くの卒業生が小学校の教員になっている。2020年から小学校では第3学年と第4学年で外国語活動が必修になり、また、第5学年と第6学年では外国語が教科になった。従って、将来的に、中学校や高等学校の教員になったとしても学部課程を卒業するにあたり、小学校英語科指導法等の教科の指導法を履修しなければならない。そのためには、教材や指導案等の学習をする必要があるが、その土台となる基本的な英語力が重要な要素になってくる。大学の4年間においてもしっかりと英語力を維持し、または、向上させていく必要がある。

本調査が、これからの小学校教員養成課程におけるカリキュラム編成や授業構成などの点で有効な資料となりうるであろう。近年、教員養成課程における教師教育の専門性が課題となっている（武田・多賀，2022）。さらに、公立小学校の教員採用試験の競争率の低下が問題となっている。競争率の低下が教員の質の低下につながることへの懸念も聞かれる。しかしながら、本研究の結果が、英語学習への効果的なカリキュラム編成や教師教育の専門性を高め、質の高い教員養成を目指すことにつながるであろう。

2 調査方法

2.1 調査対象者

本研究の調査対象は、2013年度から2022年度の小学校教員養成課程の大学1年生合計742名である。筆者達が前期に担当したコミュニケーション英語の履修者で、各年度の人数の内訳は表1に示した通りである。調査は、大学入学までの過去の英語学習に基づく意識を調査するために、4月の最初の英語授業でアンケートに答える形で行われた。調査対象者の英語力は、ほぼ中級あるいは中級の上である。なお、回答においては、学会や論文等において発表されること、その際、個人が特定されることはないことを説明した上で、同意できる学生のデータのみを使用した。

2.2 データ収集方法

年度初めの4月、1年生の必修科目である「コミュニケーション英語」の第1回目の授業において、質問紙調査（5件法）を実施した。入学直後の意識を調査するため、後期の「コミュニケーション英語」履修者は調査には含まれていない。ただし、2020年度のみ、コロナウイルス感染症対策のため、5月からオンラインで授業が始まったこともあり、7月の最後の授業（対面）で大学入学前までのことを思い出して回答をお願いした。質問紙調査の質問項目は以下の通りであった。

1. 英語は好きですか。

①とても嫌い ②嫌い ③どちらとも言えない ④好き ⑤とても好き

2. 英語は得意ですか。

①とても不得意 ②不得意 ③どちらとも言えない ④得意 ⑤とても得意

3. 英語について思うことを自由に書いて下さい

4. 小学校の時の英語学習は楽しかったですか。

①全く楽しくなかった ②楽しくなかった ③どちらとも言えない ④楽しかった ⑤とても楽しかった

5. 中学校の時の英語学習は楽しかったですか。

①全く楽しくなかった ②楽しくなかった ③どちらとも言えない ④楽しかった ⑤とても楽しかった

6. 高校の時の英語学習は楽しかったですか。

①全く楽しくなかった ②楽しくなかった ③どちらとも言えない ④楽しかった ⑤とても楽しかった

7. これまでの英語学習について思うことを自由に書いて下さい。

2.3 分析方法

量的な分析として質問項目1, 2, 4, 5および6の平均値を算出し比較した。また、質的分析には問7を用いて、校種ごとに回答となる部分を切片化し、それぞれのコード化（コーディング）を行った。次に、得られたコード

からカテゴリーを生成し、類似性や関連性、相違点などについて検討した。

3 結果と考察

3.1 量的調査結果

表1は、「英語の好き・嫌い」(質問項目1:Q1)、「得意・不得意」(質問項目2:Q2)、および小学校から高等学校までの「英語の授業は楽しかったか」(質問項目4:Q4から6:Q6)の年度ごとの結果である。また、図1は、質問項目1と質問項目2の平均値の年度ごとの推移を折れ線グラフで表したものである。同様に、図2は、質問項目4、5と6の平均値の年度ごとの推移を折れ線グラフで表したものである。

表1 Q1, Q2, Q4, Q5およびQ6の年度ごとの結果

Year		2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
	<i>n</i>	40	40	39	125	128	82	83	81	41	83
Q1	<i>M</i>	3.55	3.38	3.23	3.14	3.52	3.17	3.31	3.77	3.32	3.30
	<i>SD</i>	0.75	1.05	0.93	1.04	0.98	0.97	0.97	0.93	0.96	0.93
Q2	<i>M</i>	2.58	2.50	2.36	2.42	2.65	2.40	2.65	2.80	2.66	2.41
	<i>SD</i>	0.81	0.82	0.93	0.88	0.94	0.94	0.90	0.86	0.88	0.90
Q4	<i>M</i>	4.13	3.50	4.00	3.85	3.79	3.82	3.94	3.90	3.68	3.81
	<i>SD</i>	0.69	0.93	0.95	0.93	0.93	0.94	0.86	0.93	1.04	0.96
Q5	<i>M</i>	3.75	3.28	3.54	3.44	3.57	3.44	3.55	3.65	3.61	3.39
	<i>SD</i>	0.90	0.99	0.79	1.03	1.01	1.02	0.89	0.99	1.05	1.09
Q6	<i>M</i>	2.85	3.00	2.82	2.73	3.22	2.74	2.83	3.11	2.90	2.95
	<i>SD</i>	1.00	1.18	1.02	1.07	1.17	1.06	1.18	1.04	1.00	1.10

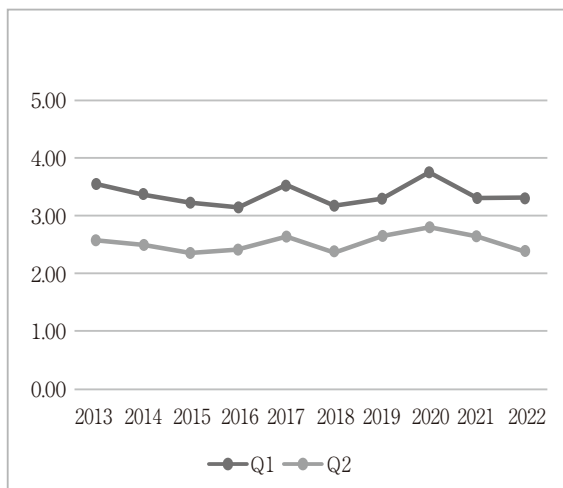


図1 Q1とQ2の年度ごとの平均値の推移

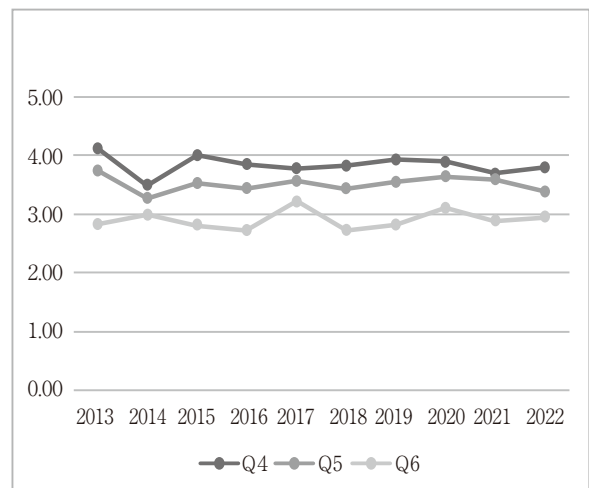


図2 Q4, Q5およびQ6の年度ごとの平均値の推移

質問項目1の「英語が好き」への回答の平均値にあまり大きな変化は見られなかった(表1および図1参照)。しかしながら、一要因分散分析の結果、最も低い2016年度の平均値3.14および2番目に低かった2018年度の3.17と最も高かった2020年度の3.77の間には有意差が認められた($p < .01$)。2020年度だけ高いが、この年度以降、高い数値が継続しているわけではないため、小学校高学年における外国語活動の必修化(2011年)の影響であるかどうかを探ることは困難である。大きな影響はないと言えるだろう。また、質問項目2に関しては、一要因分散分析の結果、どの年度間にも有意な差は認められず、どちらかと言うと「英語は不得意である」という傾向で変わらなかった(平均値は2.36から2.80で推移)。有意差は認められなかったが、質問項目2の平均値の最高が2020年度であった。この年の新入生は、英語が好きである傾向も高い。2020年は、コロナウイルス感染症対策のため、5月からオンラインで授業が始まり、後半になって対面授業が開始された年度である。7月末の最終授業において質問紙調査をおこなったが、

入学早々、休講やオンラインによる英語の授業を経験したにも関わらず、比較的、肯定的に英語や英語学習を捉えていたようである。いずれにしても、これらの結果から、英語に対しては大変好きではないが、嫌いでもなく、大学の英語学習環境次第で変化していく可能性があると言えるだろう。

英語学習の楽しさに関しては、小学校の平均値が高く、中学校、高等学校と段々下がっており、この傾向は毎年変化がなかった。質問項目別に見ると、小学校（質問項目4）と中学校（質問項目5）では、それぞれの年度間に対して一要因分散分析を行った結果、有意差はなく、この10年間全く変化がなかったと言える。また、高等学校では、2016年度と2017年度の間にのみ有意な差が認められたが（ $p < .05$ ）、ほとんど大きな変化はなかったと言えるだろう。これらの結果から小学校では比較的楽しく感じていた英語学習が、中学校から高等学校に進むにつれて楽しく感じられなくなってきた。英語学習の内容が増え、難易度も高くなっていく事もあるが、受験に向けた英語学習から英語への興味や楽しさが薄らいできたようである。受験による波及効果は大変大きいことが再確認された。

3. 2 質的調査結果

表2は、小学校時の外国語（英語）学習に対する自由記述を質的に分析した結果である。過去10年間のうち、2014年度を除いては「楽しい授業」が抽出されていることから、小学校は「楽しい授業」が展開されていたことがわかる。内容面からは、ゲーム、英語の歌（を歌う）、劇などの語が複数回確認できる。5年生と6年生で「外国語活動」が必修化された2011年に、5年生と6年生だった児童が大学に入学したのが、それぞれ2018年度と2019年度である。2017年までとの間に大きな変化は見られない。過去10年間、大きな変化もなく、一貫して児童が楽しいと思う授業を提供し続けてこられた小学校教員の努力は素晴らしいの一言に尽きる。いかに学習者の興味・関心を把握し、楽しいと思える授業を行うことが大切であることを示している。

ただし、コメントの分量は、他校種に比べて少ない。卒業してから随分と時間が経過しており、楽しかったという思いだけは鮮明に覚えているが、詳細については思い出しづらかったかもしれない。

表2 小学校の外国語（英語）学習に関するコメントの分析

年度	コード	内容
2013	楽しい授業	・友達と話したり、ゲームをしたりしてとても楽しかった。
2014	ゲーム中心の授業	・ただの室内ゲームばかりする授業。
2015	楽しい授業	・ゲーム形式でとても楽しかった。
2016		・グループやクラス活動が多く、ゲームも交えていたので、すごく楽しかった。
2017		・歌やゲーム中心で楽しかった。 ・楽しい授業に参加できたことで、英語に興味を持つきっかけになった。
2018		・単語を覚える競争や夢を英語で言ったりして楽しかった。 ・ゲームやALTと触れ合って、楽しそうな授業だった。
2019		・歌う英語学習はとっても楽しかった。 ・劇などをやって、楽しかった記憶がある。
2020		・小・中までは主体的に学ぶことが多く、楽しみながら学習するのが最も効率的だと感じた。 ・何事も楽しんで学ぶことが大切だと思うので、小中の英語の授業はよい。
2021		・班ごとに英語のカードゲームをしたり、英語の歌を歌ったりしたのが、楽しくて印象に残っている。 ・遊びを交えてゲームをした。
2022		・歌で英語を覚えていて楽しかった。 ・歌を歌ったことしか覚えていない。 ・遊びのような感じで楽しかった。 ・学習内容を理解できていたので、楽しさを感じる事ができた。

表3は、中学校時の外国語（英語）学習に対する自由記述を質的に分析した結果である。表3を見ると、過去10年間で「楽しい授業」と「楽しくない授業」が混在していることがわかる。小学校では「楽しい授業」のみであったが、中学校では「楽しくない授業」も表中に3回確認できる。

まず「楽しい授業」の内容が小学校とどのように違っているかに注目する。音楽を取り入れた授業に加えて、日本語字幕で映画鑑賞、活動的な授業、教師の海外体験を聞くなどの活動が挙げられる。一方、「楽しくない授業」の内訳は、教科書を読むだけのなぞる授業、座学で多くを覚えなくてはならない授業、文法・発音をしっかり習いたかったというものもあった。さらに、小学校にはなかったものとして、「先生との相性」がある。中学生になると自我が確立しつつあり、英語の教え方そのものはもちろんのこと、人として相性がよい、あるいはよくないというケースも生じると考えられる。記載されたコメントの分量としては、小学校に関するコメントと同様、少なかった。

表3 中学校の外国語（英語）学習に関するコメントの分析

年度	コード	内容
2013	良い授業	・活動を通じての授業は楽しかった。 ・チャンツをやり、とても好きになって、頑張って勉強した。
2014	楽しくない授業	・教科書を読むだけの、休み時間の延長のような感じ。
2015	楽しい授業	・音楽を取り入れた授業が楽しかった。
	楽しくない授業	・訳をやることが中心で、機械的作業になった。 ・座学で覚えることがたくさんあって苦手と感じた。
2016	楽しい授業	・英語の曲をみんなで聴いたり、日本語の字幕で映画を観たりする授業が楽しかった。
	先生との相性	・先生がとても面白くて、わかりやすい、よい先生だった。 ・英語の歌を流したり、外国の文化を教えてくれたりした。
2017	楽しい授業	・ジャレマガを読んでいた、楽しかった。 ・ビンゴなどゲーム感覚授業が楽しかった。
	楽しくない授業	・教科書をなぞる授業で面白くなかった。 ・発音・文法をしっかり習いたかった。
2018	楽しい授業	・洋画を英語で観たことが印象的だった。 ・中学校での英語は活動的だった。
2019		・話すことなど、中学の授業は楽しかった。 ・活動を通しての授業が多く、参加するのが楽しかった。
2020		・小・中までは主体的に学ぶことが多く、楽しみながら学習するのが最も効率的だと感じた。 ・何事も楽しんで学ぶことが大切だと思うので、小中の英語の授業はよい。
2021		・歌やスピーキングのミニテストを使って、ゲームのような感覚で学べるのが楽しかった。 ・中学から本格的な英語学習となり、先生の海外での話を聞くのがとても楽しかった。
2022		・遊びのような感じで楽しかった。
		・学習内容を理解できていたので、楽しさを感じることができた。

表4は、高等学校時の外国語（英語）学習に対する自由記述を質的に分析した結果である。小学校時および中学校時の外国語学習に対する記述に比べて、高等学校時の記述はどの年度を見ても多い。小・中学校に比べて、学習経験に対する記憶が鮮明で、大学入試に英語の点数が直結していることも大いに関係しているからであろう。その中でも、圧倒的に「受験英語に対する否定的意見」が多い。2014年度を除き、毎年記述されている。内容については、入試で点数を取るために詰め込み式で暗記するだけの楽しくない学習とまとめることができるであろう。入学したての大学1年生にとっては、人生を左右しかねないセンター試験や共通テストを終えて、念願の大学入学を果たし、ようやく解放された受験勉強に対する率直な思いが溢れ出てきたと考えられる。

しかし、受験に対する否定的な見解が多い一方で、「受験に対する肯定的意見」もこの10年間に何度か記述がある。内容に関するキーワードから、「(英語が) 分かる」と得点も伸びて、だんだんと楽しくなる」といえるだろう。高校生になると難しい内容が理解でき、得点が伸び、成果につながると、分かる楽しさや自己効力感が満たされて楽しくなるだろう。2020年度の「興味をかき立てる有益な授業」や2021年度の「有益で楽しい授業」からも、受験英語が必ずしも役立つと言えない。単語や文法といった覚えなくては行けない項目も、たとえ道具的な動機付けであっても、学習する目的を理解した上で暗記したり、既有知識をコミュニケーション活動の中で使用したりすることによって、学習者が成果を実感し、自信を得るだろう。このように高等学校の外国語学習も、受験のために学んだ知識も実践が融合されて、両立することができると思われる。

2014年度および2022年度に、「授業内容の難化」がコード化されている。高等学校に入ってから、内容が急激に難しくなり、ついていけず嫌いになったとの記述があったが、小・中学校の楽しい授業に慣れてきた学習者が、高等学校における学習内容の急激な難化に戸惑い、挫けたと考えられる。また、2016年度だけであるが、「先生との相性、出会い」がコード化された。この項目は中学校に対する自由記述でも確認できたが、高校生ともなると自我の確立に加えて、学習スタイル、嗜好も細分化される。教師の行う授業スタイルとの相性が学習者の英語の好き嫌いに影響を及ぼしている。これはCronbach (1957) の提唱した適正処遇交互作用と一致していると言える。

コミュニケーションに関わる項目（「コミュニケーションの楽しさ」および「コミュニケーション力の重要性」）が過去10年間に2回出てくる。授業でALTと実際に英語でやりとりをした経験が楽しかったことが伺える。自ら英語を使って、実際にコミュニケーションをはかることが、いかに大切かがわかる記述である。

2015年度および2017年度には、「海外研修のよさ」が確認できる。カナダや台湾といった外国での実際のコミュニケーションの機会が楽しく、有益だったことがわかるコメントである。海外研修に行ける高校生はそれほど多いとは思えないが、せっかくの機会を有効活用しようという意識の高さが伺える。

上記の結果を踏まえると、受験勉強はあくまでも外的な動機付けであり、大学1年生は英語を意思疎通のツールとして身につけたいと思っていることが、コメントから伺える。ここは教師の発想を抜本的に切り替えて、受験を包括した英語学習を今後提供していくことを目指したい。GIGAスクール構想で端末機器、Wi-Fi設備などハード面の充実

が図られている，今こそ本腰を入れて受験を包含した学習方法を模索する時であろう。

表4 高等学校の外国語（英語）学習に関するコメントの分析

年度	コード	内容
2013	テストのための学習	・だんだん楽しくなっていった。 ・得点を稼げる教科だった。
	受験英語に対する否定的意見	・単語・文法学習嫌い。 ・詰込み学習嫌い。
2014	授業内容の難化	・高校から内容が急に難化した。 ・授業についていけず，嫌いになった。
	読解活動の楽しさ	・英語の物語を読むことが楽しかった。
2015	受験英語に対する否定的意見	・センター試験対策ばかりで楽しくない。
	コミュニケーションへの楽しさ	・英語コースで友達やALTと話すのはとても楽しい。
	海外研修のよさ	・カナダ研修は楽しかった。
2016	受験英語に対する肯定的意見	・テストや試験のための勉強もわかると楽しい。 ・受験勉強を通じて，読むことがだいぶ好きになった。
	受験英語に対する否定的意見	・テストで点を取るための英語学習。 ・とても辛かった。
	先生との相性，出会い	・話しやすい先生で，頑張っでどんどん英語が好きになった。 ・恩師のおかげで，中学で全く楽しくなかった授業が楽しく思えた。
2017	受験英語に対する肯定的意見	・受験期に伸びた。
	受験英語に対する否定的意見	・大学受験時は，ひたすら暗記をしていたので，あまり楽しめなかった。
	コミュニケーション力の重要性	・先生がグループワークを大切にしていたので，英語で相手に何か伝えるということをよくして いて，楽しかった。
2018	海外研修のよさ	・修学旅行で台湾に行った時，話す力が大切だと思った。
	受験英語に対する否定的意見	・受験のために覚えましょうという感じばかりで暗記中心。 ・センター試験のための書いて覚えるだけの学習が嫌い。
2019	受験英語に対する否定的意見	・テストのために勉強している感じ。 ・1年からずっと試験対策という感じで楽しくはなかった。
	楽しい授業	・歌を歌ったり，ペアで話したり，実践する（声を出す，話す）授業が多かった。 ・楽しかったのは，1つの単語からどんどん派生させていくのが，面白かった。
2020	受験英語に対する否定的意見	・試験用の勉強ばかりで，英語力は身についたが，あまり楽しい活動ではなかった。 ・授業が辛いと感じることも多々あった。
	文法に苦労	・文法の授業が多く，会話を実際にすることが減った。 ・文法の勉強をしていなかったため，高校英語が大変だった。
	興味をかき立てる有益な授業	・高3の授業が一番役立った 教科書は1回も使わず，グループで英作文をしたり，リスニング や発音をしたりした。 ・英語でプレゼンテーションをする機会があり，自分で英語を話してみたことで英語に興味を持 つようになった。
2021	受験英語に対する否定的意見	・受験やテストのために文章を暗記する詰め込み学習で，曖昧なまま学習していた。 ・受験対策の英語は少し窮屈に感じていた。
	有益で楽しい授業	・リスニング力がかなり上がった 継続することで力がつく。 ・高校の英語学習が今までで一番楽しかった。 ・高校2，3年はディクテーションなどがあり，楽しかった。
2022	受験英語に対する肯定的意見	・受験勉強として英語に触れる機会を増やしたことで，英語が実は楽しいものだと気づけて好き になった。
	受験英語に対する否定的意見	・テストや入試のために覚える授業。 ・受験を意識するような授業は楽しくなかった。 ・受験のための授業ばかりでコミュニケーション英語の科目名に沿っていない。
	授業内容の難化	・内容が急に難しくなるのはよくない。 ・高校に入って長文などが難しくなった。

表5は，校種を問わない全体的な英語学習に対する自由記述を質的に分析した結果である。ここでは圧倒的に「スピーキングの機会不足」が多い。過去10年間で8回言及されている。また，この点から「スピーキングへの不安，苦労，苦手」に波及している。新入生たちは，スピーキングが必要で，上達したいという思いは持っているものの，学校現場ではその場面が十分に用意されておらず，不安や苦手意識を抱えてしまっている。一方で「コミュニケーションの機会，楽しい」という項目もあり，修学旅行先での外国人観光客との英語での会話，教室でのペアワーク，グループワークが楽しいと書かれている。学習者自らが実際に英語を使って話すことが，いかに大切であるかが伝わ

てくるコメントである。

次に目を引くのが、「単語・文法苦勞，苦手，努力」である。覚えることがたくさんあって大変であるという点と，ひたすら覚えるだけで辛いという点に大別できる。後者については，単語や文法を覚える意義を伝えながら導入すれば，少しは辛さも和らぐのではないだろうか。そして，覚えたものを使用できるスピーキングの場面を設けて，実際に英語を用いたコミュニケーションが体験できるのが良い方法ではないかと思われる。

表5 校種を問わない全体的なコメントの分析

年度	コード	内容
2013	単語苦勞	・単語を覚えるのが大変で，できなかった。 ・単語をあまり覚えてこなかったから，もっとやればよかった。
	文法苦手	・文法が苦手で苦勞した。 ・文法が大嫌いだった。
2014	スピーキングの機会不足	・スピーキングの機会が少なかったので，話さなかった。 ・スピーキング力がつく授業したい。
	単語苦手，苦勞	・単語が覚えづらく大変。
	単語・文法努力	・単語と文法をやれば何とかなる。
2015	わかるとうれしい，好き	・英語を聞いて理解できた時の嬉しさが大好き。 ・基礎を固めてグンと成績伸びて，好きになった。
	スピーキングの機会不足	・話す機会が少なかった。 ・話ができるようになりたい。
	暗記に苦勞	・覚えることがたくさんあり，大変で難しい。
2016	単語に苦勞	・単語がいっぱいあって覚えられない。
	スピーキングの機会不足	・スピーキング力を伸ばす授業が少ない。
	単語・文法に苦勞	・文法が難しく，スペルを覚えるのが大変。
2017	コミュニケーションの機会，楽しい，好き	・英語で周囲の人と話して，力がつく授業が好き。 ・修学旅行で外国人観光客と話したことが一番楽しかった。
	スピーキングの機会不足	・話す機会がとても少なかった。 ・日本の英語教育では，しゃべれるようにはなかなかかなれないので，改善してほしい。
	単語に苦勞	・単語をひたすら覚えて，辛いものだった。
	先生との相性，教え方	・先生に恵まれてきて，本当に楽しかった。 ・英語は得意，不得意がすぐ出るので，先生が楽しく教えないといけない。
2018	わかると楽しい	・英文を理解できた時は嬉しくて，楽しかった。 ・勉強すればするほど，授業が楽しくなった。
	友人と間違い気にせずコミュニケーション	・友人とコミュニケーションをとることが多くて，間違っても何も感じないことが多かった。 ・英語で友達と会話することが大事。
	スピーキングの機会不足，不安	・話さないことが多く，間違いが怖くてあまり話せなかった。 ・あまり人前で話すことがなかったので，不安しかない。
2019	文法中心で面白くなく，嫌い	・文法ばかりで面白くなかった。 ・文法中心で受動的に勉強することが多かったかなと思う。
	単語・文法に苦勞	・単語と文法を覚えることが難しい。
	暗記中心でつまらない	・暗記が中心であまり楽しくなかった。 ・座学中心で暗記することが中心のため，正直つまらなかった。
2020	繰り返す，成果出ると楽しい	・勉強した成果が出ると，楽しくて面白い。 ・繰り返し何回もやることで力がつく。
	スピーキングの機会不足で苦勞	・もう少し英語を話す機会が欲しかった。 ・読むのは得意になったが，話すのはまだ苦手意識がある。
	スピーキング楽しい	・英語を使って友達と会話するのが楽しかった。 ・話しながら勉強する方が楽しいし，身につく感じがした。
2021	わかると楽しい	・できるところまで行くと楽しく感じる。 ・読めるようになると英語が楽しく感じてくる。
	スピーキングの機会不足で苦勞，機会を希望	・話す英語はディベートの時だけなど割と少なく感じた。 ・話すとなると語彙が出てこない。 ・もっと話す技術を身につけたい。
	ALTの楽しい授業	・ALTがゲーム形式にしたり工夫したりして，楽しく英語を学ぶ環境を作ってくれた。 ・ALTと授業をするのがとても楽しかった。
2022	単語・文法に苦勞	・単語や文法を覚えることが大変で苦手。 ・単語はきちんとした意味を把握せず，感覚や想像で読むことが多かった。
	自らの努力不足	・自分から積極的に学んでこなかったため，苦手意識がある。
	楽しいコミュニケーション活動	・人とコミュニケーションをとれるところが楽しかった。 ・ペアやグループで英語を話す活動は特に楽しかった。
2022	スピーキング機会不足で苦勞，苦手	・話すスキルが全く身につけていない。 ・スピーキングに苦手意識がある。

4 結論

量的分析結果から、以下のことが明らかになった。「英語が好き」への回答の平均値にあまり大きな変化は見られなかった。過去10年間で、小学校、中学校、高等学校と年代が上がっていくにつれて、英語が楽しくなくなっていくという傾向に変化はなかった。本学新入生の特徴として、英語に対しては大変好きというわけではないが、嫌いという感情もないと言えるので、大学における英語学習環境次第で変化していく可能性がある。

質的分析結果からは、以下のことがわかった。小学校、中学校、高等学校と学習内容が難化するに伴い、英語が楽しいと思える機会が減った。受験がその原因の一つである。一方で、英語がわかるようになったおかげで楽しさが増えるようになった層も一定数存在している。また、スピーキングの機会が絶対的に不足しており、経験が少ないがゆえに不安を感じ、苦手意識を抱えている学生も多い。学生のニーズとしては、英語を使ったコミュニケーションを実際に経験することが挙げられる。学生には基礎力があると思われるので、大学で行う授業のやり方によっては、その力を伸ばさせてあげることも可能となるであろう。

では、どのような手立てが考えられるだろうか。具体的にはタスクやプロジェクト学習を用いて、動機づけを高めることが一つの可能性として考えられるだろう。プロジェクト学習においては、課題の発見と目標の設定、そしてそれを達成するために思考力、協働力、実践力等が求められる。チームとして取り組めば、課題解決力や自己表現力に加えて、コミュニケーション力や対話力も必然的に鍛えられることになる。大学時代にこのような鍛錬を積んでおけば、社会に出た時に英語が使えることが実感できるはずである。また、小学校教員養成課程の場合、卒業生の多くが小学校の教員になるが、そのことを想定して基本的な英語運用力を向上させておかなければならない。小学校で英語を教える教師に求められる英語力とはどのくらいのものであろうか。以下に示すものは、「小学校教員研修外国語（英語）コア・カリキュラム」（東京学芸大学，2017）で提示されている小学校外国語の指導で求められている英語力の項目である。

- ・授業で扱う主たる英語表現の正しい運用
- ・発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した会話
- ・板書や提示物における英語の正しい表記
- ・ALT等と授業について打ち合わせをするための表現
- ・児童の発話や行動に対する適切な言い返し
- ・クラスルーム・イングリッシュを土台にした意味のあるやり取り
- ・児童の理解に合わせた適切な言い換え
- ・児童の発話や行動に対する即興的な反応

高度な英語力というよりも、基本的な語彙や文法を考えることなく、口をついて出てくるような運用力が必要とされる。そのためには、普段から英語をどれだけ使用しているか、また、模擬授業や教育実習等で授業を進める際にどれだけ実際に英語を使っているかが問われるであろう。その下地を作るために、学生たちが望むスピーキング力を保証するためのコミュニケーションの機会を与えることがまず大事になろう。そして、話し手だけでなく、クラス全体の雰囲気としても、間違いを気にしないで積極的に英語で話すことを奨励する雰囲気、加えて、クラスの構成員が間違いを許容する空気を醸成することが肝要であろう。

最後に、本調査がこれからの小学校教員養成課程におけるカリキュラム編成や授業構成などに際して、有効な資料となれば望外の喜びである。

参考文献

- 武田信子・多賀一郎（2022）.『教師の育て方』学事出版
- 東京学芸大学（2017）文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業平成28年度報告書」
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html>（2022.9.1閲覧）
- 古家 聡・櫻井千佳子（2014）.「英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』4, 29-50
- 松崎久美（2021）.「大学生初年次の英語に関する意識調査－名古屋芸術大学における全学共通科目「英語1」受講生に対するアンケートより」『名古屋芸術大学研究紀要』第42巻, 319-327

文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/___icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf (2022.8.31閲覧)

Cronbach, L. J. (1957). The two disciplines of scientific psychology. *American Psychologist*, 12, 671-684.

Attitudes Toward English and English Teaching Among University Students in Elementary School Teacher Training Programs

– Based on a Comparison of Elementary Through High Schools over the Past Ten Years

Masatoshi WATANABE* · Hiromasa OHBA*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to clarify how university students studying in elementary school teacher training programs are aware of English and the English teaching they have received when they reflect on their past English learning just after entering university. In particular, we report the results of an exploratory study of the influence of changes in society and education by comparing the awareness of first-year students over the past decade. A total of 742 first-year students were surveyed from 2013 to 2022, and the mean response of “I like English.” ranged from 3.14 to 3.77 (on a 5-point scale), with not much change being observed. The tendency to be self-adjudged as “I am poor at English.” also remained unchanged. Regarding the enjoyment of learning English, the average score was high in elementary school but gradually decreased in junior high school and high school, and this trend did not change year on year. However, in addition to these quantitative analyses, qualitative analyses based on the students’ comments revealed that individual students’ attitudes toward English and English learning varied. With the introduction of compulsory foreign language activities in the middle grades of elementary school and the inclusion of a foreign language as a subject in the upper grades, it may be necessary to organize a curriculum based on the results of this study that will enable university students in elementary school teacher training programs to not only continue learning English as a language but also develop their proficiency in English.